

立山町埋蔵文化財分布調査報告Ⅵ

1990年度

立山町教育委員会
富山大学人文学部考古学研究室

1991年3月

立山町埋蔵文化財分布調査報告Ⅵ

1990年度

立山町教育委員会
富山大学人文学部考古学研究室

1991年3月

序

靈峰立山の山麓に広がる立山町は、古くより人々の生活の場として、また立山権定に代表される信仰の場として、数多くの文化遺産を育み守ってきた所です。

ところが、近年、押し寄せる開発の波の中で、これらの貴重な文化遺産は次々と破壊され消滅していくこうとしています。

町ではこの事態を重視し、かつ文化財の保護を通して先人の文化を理解・伝承することが、真の地域社会の発展へつながるものであるとする観点から、そのための基礎資料を充実することにいたしました。

この報告書がより多くの方に利用され、文化財保護の一助となることを願ってやみません。

最後に、調査の実施及び報告書作成にあたり、御協力いただいた地元の方々、また御援助をいただいた富山県教育委員会、富山県埋蔵文化財センターはじめとする関係諸機関の方々に、厚く御礼申し上げます。

平成3年3月

立山町教育委員会

教育長 金川正盛

例　　言

- 1 本書は、立山町教育委員会が国庫補助事業として実施している遺跡詳細分布調査の第6年度（1990年度）の報告書である。
- 2 調査にあたっては、富山県埋蔵文化財センターおよび富山大学考古学研究室の指導と協力を得て、後記の調査団を編成してこれを実施した。
- 3 遺物整理・実測・製図・写真撮影は、立山町教育委員会社会教育課森秀典と富山大学考古学研究室の全員が協力しておこなった。
- 4 本文は、宇野隆夫（富山大学人文学部助教授）、前川要（富山大学人文学部講師）森秀典、春日真実、田中道子（以上富山大学大学院人文科学研究科学生）金木和香子、越前慶祐、柿田祐司、亀井聰、篠川修一、瀬戸智子、榎木和代、葛山拓也、高橋浩二、谷杉延子、向山静子、野村祐一、片岡英子、河合君近、鈴木和子、浜木さおり、宮沢京子、森田知香子、渡辺克昌（富山大学人文学部考古学研究室学生）が分担して執筆した。執筆の分担は文末に記した。
- 5 参考文献は本文末に一括し、通し番号を付して示した。
- 6 遺物番号は図版毎に通し番号を付した。実測図版と写真図版の対照を図版下に示し実測図と写真的番号を統一している。
- 7 編集は宇野隆夫、前川要と森秀典が協力しておこなった。
- 8 本書の作成にあたっては、調査団顧問の岡崎卯一氏、同安田良栄氏をはじめとする多くの方々から貴重な御教示を受けた。深く感謝して御礼申し上げる。

目 次

第1章 はじめに	1
1 調査の目的	1
2 調査の経過	1
3 立山町の地勢と自然環境	2
4 1990年度調査地区の地勢と地区割	4
第2章 分布調査の成果	5
1 遺跡と採集遺物	5
(1) 野沢遺跡	5
(2) 金剛新遺跡	5
(3) 新瀬戸古窯跡	7
(4) 米道遺跡	7
(5) 谷口遺跡	8
(6) その他の採集遺物	9
2 遺物の散布状態	12
(1) 繩文時代遺物の散布状態	12
(2) 弥生・古墳時代遺物の散布状態	12
(3) 古代遺物の散布状態	12
(4) 中世遺物の散布状態	12
(5) 近世遺物の散布状態	16
(6) 遺物の散布についての小結	16
第3章 おわりに	17
参考文献	18

図版目次

関連頁

- 図版 1 VI地区航空写真(1) 1951年撮影 1 ~ 4
図版 2 VI地区航空写真(2) 1988年撮影 1 ~ 4
図版 3 遺物実測図(1) 横木・高橋・向山・葛山・谷杉・野村製図 5 ~ 16
図版 4 遺物実測図(2) 横木・高橋・向山・葛山・谷杉・野村製図 5 ~ 16
図版 5 遺物写真(1) 森・高橋撮影 5 ~ 16
図版 6 遺物写真(2) 森・高橋撮影 5 ~ 16
図版 7 遺物写真(3) 森・高橋撮影 5 ~ 16
図版 8 遺物写真(4) 森・高橋撮影 5 ~ 16
図版 9 VI地区の遺跡と遺物採集地点 前川・高橋作成 5 ~ 18

插図目次

- 第1図 立山町の気候・植物帯の垂直変化 「立山町史」から 2
第2図 立山町西部の地勢 前川・高橋作成 3
第3図 VI地区地区割図および縄文時代遺物散布図 前川・谷杉・野村・向山作成 13
第4図 VI地区弥生・古墳時代および古代遺物散布図 前川・谷杉・野村・向山作成 14
第5図 VI地区中世および近世遺物散布図 前川・谷杉・野村・向山作成 15

第1章 はじめに

1 調査の目的

立山町が人の活動の舞台となったのは、現在知られている限りでは、今から約2万年前、吉峰台地においてである。以後、旧石器（先土器）・縄文時代は町東部及び東南部丘陵上、弥生時代は町北部のデルタ地帯、古墳時代以降は町中央部の扇状地というように、その生活の場は時代により変化してきているが、現在に至るまで連續と人びとの営みが続いている。¹⁻⁶

従って遺跡も多数存在しており、1972年（昭和47年）の『富山県遺跡地図』においては63個所の遺跡が登録されている。そして、その後発見された遺跡も多く、未発見・未登録の遺跡も少なからず存在するものと予想される。

また近年の開発行為の増加に伴い、遺跡の保護と開発の調整が社会問題化してきており、中には人知れぬまま消滅した遺跡もあった可能性がある。

このような状況下において、埋蔵文化財の保護と活用のため、また保護と開発との調整のため、基礎資料としての遺跡台帳、遺跡地図の整備充実が急がれていたのである。

2 調査の経過

以上の理由により、立山町教育委員会では、国庫補助事業として遺跡詳細分布調査をおこなうことになった。

1985年（昭和60年）3月27日に、町教育委員会と富山大学考古学研究室との会合がもたれた。その結果、町教育委員会を中心とした調査團を編成し、元立山町史編纂主任岡崎卯一氏と町文化財保護審議委員安田良栄氏を顧問に迎え、富山大学考古学研究室の全面的な協力を得て実施することとなった。

調査の方針としては、町域の中でも遺跡分布密度の濃い、町東部・東南部丘陵地帯及び町北半部の扇端・デルタ地帯を対象地域とし、5個年計画とすること、年度ごとに報告書を作成し最終的には遺跡分布図・地名表、及び主要遺跡解説等を含む報告書を刊行することが決定された。

その後、1989年（平成元年）に、町教育委員会と富山大学考古学研究室とで再度の会合がもたれ、町の平野部全体を対象地域に含め、調査を4年間延長して9個年計画で実施すること等が決定された。

今年度の現地調査は、第VI地区について（第2図）、1990年9月26日～9月30日の間、10月7日・10日の計7日間、延110人余の参加を得て実施した。

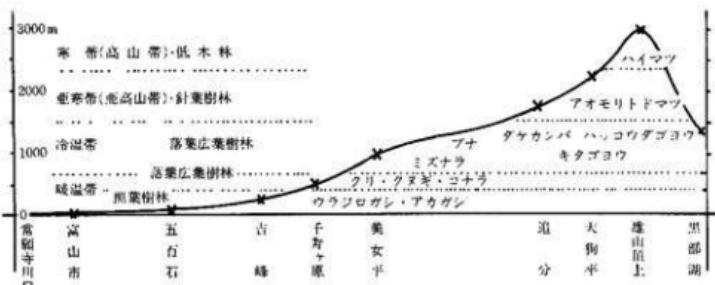
立山町埋蔵文化財分布調査団

団長 金川 正盛 立山町教育委員会教育長
 顧問 岡崎 卵一 元立山町史編纂主任
 安田 良宗 立山町文化財保護審議委員
 調査員 宇野 隆夫 富山大学人文学部助教授（調査主任）
 前川 要 富山大学人文学部専任講師（調査副主任）
 森 秀典 立山町教育委員会社会教育課主事
 調査補助員 春日 真実、田中 道子（富山大学大学院人文科学研究科学生）
 金木和香子、越前 優祐、柿田 拓司、亀井 駿、笠川 修一、瀬戸 智子
 横木 和代、葛山 拓也、高橋 浩二、谷衫 延子、向山 静子、野村 純一
 片岡 美子、河合 君近、鈴木 和子、浜木さおり、宮沢 京子
 森田加香子、渡辺 克昌（以上 富山大学人文学部考古学研究室学生）
 事務局 松井 智男 立山町教育委員会社会教育課長
 佐伯 外宣 立山町教育委員会社会教育課庶務・文化振興係長
 石原多喜子 立山町教育委員会社会教育課主任
 森 秀典 立山町教育委員会社会教育課主事

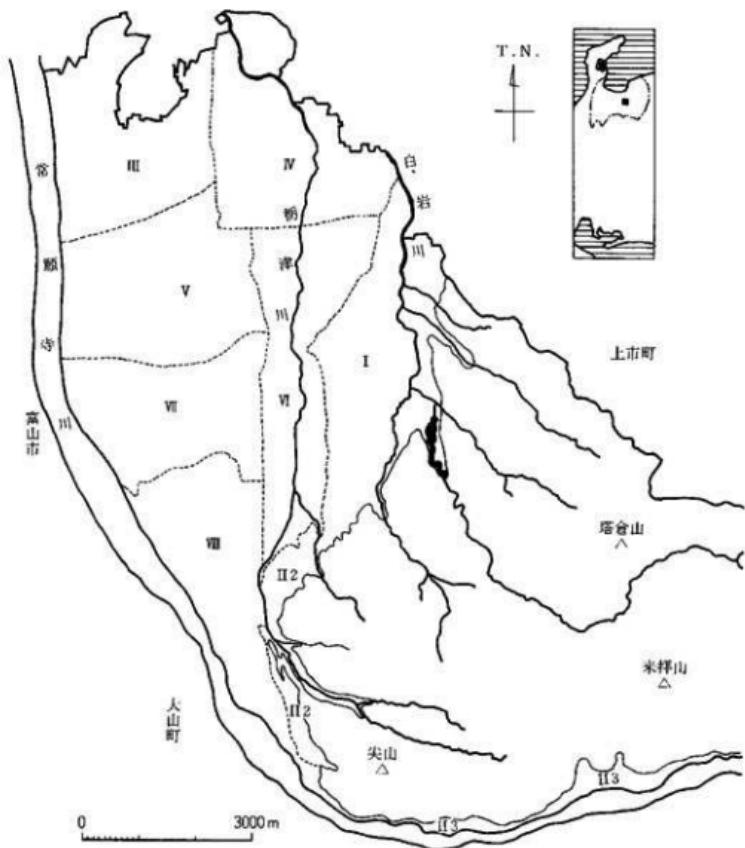
3 立山町の地勢と自然環境

立山町は富山県の東南に位置し、立山連峰に源を発する常願寺川に沿って、細長く伸びた町である。西は県の中心である富山市に、東は後立山連峰で長野県と接し、東西約43km、南北約21km、面積308km²を測る。

地形的には実に変化に富んでいる。町の北西部には常願寺川と白岩川とによって形成された三角州（アルタ）地帯があり、その南には常願寺川の扇状地が広がっている。富山湾岸までの距離は約10kmを測る。この扇状地の東側には隆起によってできた河岸段丘が南北に伸び、扇頂



第1図 立山町の気候・植物帯の垂直変化（『立山町史』から）



第2図 立山町西部の地勢(VI地区が1990年度調査地区、縮尺1/100,000)

都の岩崎寺から上流の千尋ヶ原にかけても常願寺川沿いに河岸段丘が広がる(第2図)。この河岸段丘の後背地には丘陵があり、さらに標高3,000mの山脈へと続く。これが立山連峰であり、ここには氷河地形の閑谷(カール)や、火山地形である熔岩台地やカルデラが見られる。立山連峰の東側は黒部川によって深くえぐられ、後立山連峰によって長野県に接する。

このように立山町は東西の比高差が大きいため、町域には照葉樹林帯、落葉樹林帯、針葉樹林帯、低木林帯という多様な植物帯が育成し、それに伴う複雑な動物相も存在する(第1図)。

4 1990年度調査地区の地勢と地区割

今回の調査地区は、柄津川の流域、高野・下段・釜ヶ淵地区の東部である(図版9、第3図)。

地形的には、大河川(常願寺川)が形成した低位段丘上に、中規模河川(柄津川)によって形成された複合扇状地といえよう。

水利の便が良い当地区には、金剛新遺跡(縄文時代)・米道遺跡(古代)などの存在が知られていたが、今回の調査により、地区全体としての遺跡分布状況が明らかになった。

現在、調査地区は、水田等の耕作地が大部分だが、工場の進出をはじめとする開発行為も、徐々に増加してきている。

調査は、全体を地形・水路・道路等によって11地区に大別し、さらに42の小地区に細別して実施した。

(森 秀典)

第2章 分布調査の成果

1 遺跡と採集遺物

(1) 野沢遺跡 (図版9の114) 立山町野沢

遺跡は、柄津川東岸から東へ約150m、県道口日中・五百石線の南約750mに立地する。標高は約70mを測り、範囲は東西約150m、南北約150mに及ぶものと推定する。今回の調査で新たに発見された遺跡である。

今回採集した遺物は、縄文時代の土器3片、中世の珠洲焼壺1片、近世の磁器器種不明1点である。これらのうち2点を図示した (図版3の1-2)。

図版3の1は、縄文土器深鉢の体部破片である。外面は淡黄褐色、内面は灰褐色を呈する。縄文時代晩期の土器である。2は珠洲焼壺の体部で、胎土は緻密で色調は青灰色を呈する。内面に、丸い当て具の押圧痕が見られ、外面にやや粗い叩き目を残す。吉岡編年による珠洲IV期を前後するものであろう。なお、遺跡は現在水田として利用されている。

(向山 静子)

(2) 金剛新遺跡 (図版9の115) 立山町金剛新字東江添

遺跡は、常願寺川扇状地基部、柄津川右岸に立地する。標高77mを測り、東西490m、南北525mと推定する。1975年に立山町教育委員会が発掘調査を実施し、その結果、遺構としては縄文時代の土墳1基が検出されている。遺物は縄文土器が後期中心に多量に出土し、富山県東部の縄文土器編年の好資料となっている。ほか、中世末から近世初期の土器が出土している。

今回の調査で採集した遺物は、縄文時代の土器223片・磨製石斧2点・石皿2点・磨石1点(計228片)、中世の土師器皿2片・器種不明2片(計4片)、近世の越中瀬戸碗3片、皿4片、壺2片、匣鉢4片・器種不明1片(計14片)、総計246片であり、これらのうち21点を図示した (図版3の3-23)。

3は縄文土器の口縁部破片である。RLの縄文地にヘラ状工具で文様を施してある。色調は橙褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。

4は縄文土器の口縁部破片である。外面に浮線文を施し、色調は外面暗褐色・内面褐色で、胎土に砂粒を多く含む。縄文時代晩期に属するものであろう。

5は縄文土器の深鉢の口縁部破片である。外面に粗いRL縄文を施すが、多少摩滅している。色調は褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。

6は縄文土器の浅鉢の口縁部破片である。口唇部に弧状の面をとり、口縁部下を一度凹ませ外反させている。色調は灰白色を呈し、胎土に砂粒を含む。縄文時代後期中葉加曾利B式並行

期に属するものであろう。

7は縄文土器の胴部破片である。二条の太い降起線の中間にヘラ状工具による連続刺突文を施す。色調は橙褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。縄文時代後期前葉気屋式に属するものであろう。

8は縄文土器の浅鉢の口縁部破片である。口縁部内側に棒状工具による弧状の線をつける。色調は暗褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。縄文時代後期中葉加曾利B式並行期に属するものであろう。

9は縄文土器の浅鉢の口縁部破片である。外面に半截竹管による平行沈線を二条施し、内面にはナデ調整を施す。色調は褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。縄文時代後期後葉井口皿式に属するものであろう。

10は縄文土器の深鉢の胴部破片である。外面に三列の工字文を綴に施す。色調は暗褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。縄文時代晩期に属するものであろう。

11は縄文土器の深鉢の胴部破片である。細かい羽状縄文を地文に浅い沈線が弧状に走る。色調は赤褐色であり、胎土に砂粒を含む。縄文時代後期前葉気屋式のものであろう。

12は縄文土器の胴部破片である。変形工字類似の文様を施し、外面に朱の痕跡がわずかにみられる。色調は淡褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。縄文時代晩期に属するものであろう。

13は縄文土器の浅鉢の胴部破片である。外面に半截竹管による沈線で変形工字文を施す。色調は褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。縄文時代晩期に属するものであろう。

14は縄文土器の深鉢の胴部破片である。器壁は厚く、外面に棒状工具による刺突文が横に並んでいる。色調は外面褐色・内面暗褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。縄文時代後期後葉八日町新保式に属するものであろう。

15は縄文土器の粗製深鉢の口縁部破片である。無文であり、色調は橙褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。

16は縄文土器の深鉢の胴部破片である。外面に横位のR L 縄文を施す。色調は茶褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。

17は縄文土器の口縁部破片である。外面・内面ともにヘラ状工具でよく磨かれており、口唇部にRL 縄文が押圧されている。口縁に段を有し、段の下部に浅い刻み目が施されている。色調は暗赤褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。縄文時代後期のものであろう。

18は縄文土器の浅鉢部破片である。口縁部に二条の沈線をめぐらし、その間に列点を押し並べている。色調は灰白色を呈し、胎土に砂粒を含む。縄文時代後期前葉岩岸野式に属するものであろう。

19は縄文土器の粗製深鉢の底部付近の破片である。平底で底径8cmを測り、内面には撫で調整の跡がみられる。色調は橙褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。

20は台石である。扁平で一辺が埋んだ台形状を呈し、表裏面および窪み部に使用痕が認めら

れる。

21は縄文時代の小形磨製石斧である。体部中ほどから刃部にかけてを欠損する。重さは27.2gを量り、石材は蛇紋岩である。

22は縄文時代の定角式磨製岩斧である。刃部をわずかに欠損し、残存長約10cm、刃部幅約5.5cmを測る。重さは188.8gで、石材は蛇紋岩である。

23は台石である。三辺を打ち欠き、残りの一辺は礫面が残る。表裏面に使用痕が認められる。

以上、本遺跡は近世の遺物も存在するが、縄文時代の土器や石器が後期を中心に多量に散布する。縄文時代の単純遺跡といって差し支えないであろう。なお遺跡は現在宅地や水田となっている。

(野村 拓一、谷杉 廷子)

(3) 新瀬戸古窯跡 (図版9の116) 立山町米道

遺跡は河岸段丘の西側崖沿いに所在する。段丘の比高差は約40mである。標高は約180mを測る。1976年に立山町教育委員会が発掘調査を行ない、その結果、江戸時代に属する越中瀬戸焼の窯と考えられる遺構、及び時期・性格不明の土壙を確認した。

今回の調査で採集した越中瀬戸焼は計31点であるが、採集地点の表面には夥しい数の越中瀬戸焼が散乱していた。図示したものは、越中瀬戸皿が4点、越中瀬戸匣鉢が5点、越中瀬戸すり鉢が1点である。(図版3の24~33)

図版3の24・25は越中瀬戸皿であり、茶褐色を呈する。2mm大の砂粒を微量含む。26・27は越中瀬戸皿である。26は黒色に発する鉄釉、27は茶色に発する鉄釉をそれぞれ施す。共に胎土は精緻である。24~27全て、外面に輪轂回転削り調整を施し、輪轂の回転方向は右廻りである。

28~31・33は粗製の越中瀬戸匣鉢である。28・29は口縁部であり、硝が付着している。外面に茶色に発する鉄釉を施す。30・31・33は底部に糸切り痕を残す。33には硝が付着している。外面には、30が淡茶褐色、31・33が茶色に発する鉄釉が施されている。

32は越中瀬戸すり鉢である。内外面に茶色に発する鉄釉を施す。内面には3本と2本の櫛引き痕が観察される。

以上、本遺跡は近世の越中瀬戸窯が営まれた遺跡である。1976年の発掘調査の際、砂を入れて保存をした。現在は、農地として利用されている。

(葛山 拓也)

(4) 米道遺跡 (図版9の117) 立山町米道

遺跡は板津川扇状地扇端部の微高地上に立地する。標高は約138mを測る。規模は東西約150m、南北約180mと推定される。今回新たに発見された遺跡である。

今回の調査で採集した遺物は、縄文土器12片、中世の土師器皿1片、越中瀬戸皿3片・楕3片・匣4片の総計23片である。これらのうち6点を図示した(図版4の34~40)。

図版4の34は深鉢の口縁部付近の破片である。外面に横位の半截竹管文を4条、円形の圧痕

文を1箇所に施す。器壁は厚く、内湾ぎみに立ち上がる。色調は暗茶褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。縄文時代後期後葉のものであろう。

35は越中瀬戸すり鉢の口縁部破片である。口縁端部に外傾して面をもつ。内外面とも褐色に発色する薄い鉄釉を施す。色調は淡茶褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。

36は越中瀬戸碗の口縁部破片であり、復元口径は約12cmを測る。内面上半に黒色、下半に茶色に発色する鉄釉を施す。色調は灰色を呈し、胎土は緻密である。

37は越中瀬戸碗の口縁部破片であり、復元口径は約11cmを測る。内面上半に黒色、下半に茶色に発色する鉄釉を施す。外面には黒色に発色する鉄釉を施す。色調は灰色を呈し、胎土は緻密である。

38は越中瀬戸碗の底部破片である。高台を削り出し断面梯形に仕上げている。内面に輪轍回転撫で調整を施す。内面底部には黒色に発色する鉄釉、底部以上には茶色に発色する鉄釉を施す。色調は淡黄褐色を呈し、胎土は緻密である。

39は越中瀬戸皿の体部破片である。内外面ともに輪轍回転撫で調整を施す。内外面ともに褐色に発色する薄い鉄釉を施す。色調は淡茶褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。

40は土師器皿の口縁部破片であり、復元口径は約14cmを測る。口縁端部に外傾して面をもつ。外面は輪轍回転撫で調整、内面は撫で調整を施す。色調は淡茶褐色を呈し、胎土に砂粒を少量含む。13世紀頃のものであろう。

以上、本遺跡は縄文時代・中世・近世の複合遺跡であり、特に近世の遺物が顕著である。なお遺跡は現在、宅地・墓地として利用されている。

(高橋 浩二)

(5) 谷口遺跡(図版9の119)立山町谷口

遺跡は常願寺川扇状地基部、桶津川右岸に位置する。標高は約155mを測り、規模は東西約350m、南北約300mに及ぶと推定される。今回新たに発見された遺跡である。

今回採集した遺物は、剝片1片、古代の須恵器杯B蓋2片・不明1片、古代の錢貨1枚、中世の土師器皿3片・不明1片、珠洲壺1片、越中瀬戸碗6片・皿4片・壺2片・すり鉢1片・匣1片・不明1片の総計24片である。これらのうち12点を図示した(図版4の41~51)。

図版4の41は越中瀬戸皿である。復元口径は約15cmを測る。色調は淡褐色を呈し、内外面に褐色に発色する釉を施している。胎土は緻密である。

42は珠洲壺の胴部破片である。外面には横位の平行叩き目を施した後、右下がりの平行叩き目を施している。色調は黒色を呈し、胎土は緻密である。

43は越中瀬戸蓋のつまみ部分である。直径2.5cm、高さ1.0cmを測る。上面中央部に深さ3.0mmの刺突を施し、下部中央にも刺突文がある。上面と側面に灰色に発色する釉を施す。胎土に砂粒を含む。

44は須恵器杯B蓋の破片である。復元口径は約12cmを測る。口縁端部は断面三角形を呈する。

内外面ともに輪轂回転撫で調整を施す。色調は青灰色を呈し、胎土は緻密である。時期は9世紀前半に比定できる。

45は須恵器杯B蓋である。復元口径は約15cmを測る。端部は緩く折り曲げている。色調は青灰色を呈する。内外面ともに輪轂回転撫で調整を施す。胎土は緻密である。時期は8世紀初頭に比定できる。

46は越中瀬戸天目茶碗である。復元口径は約9cmを測る。内外面に墨色に発色する鉄釉を施しているが、一部は褐色に発色する。

47は越中瀬戸鉢である。復元口径は約21cmを測る。口縁部は外反し、端部をつまみあげる。色調は鉄釉を施し、茶褐色を呈する。内外面には輪轂回転撫で調整を施している。

48は越中瀬戸碗である。内外面とも茶褐色に発色する釉を施している。

49は越中瀬戸皿である。高台は削り出して断面三角形に仕上げている。色調は赤褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。

50は越中瀬戸皿である。高台は削り出して梯形に仕上げている。色調は灰褐色を呈し、内面と外面体部に灰色に発色する釉を施している。

51は越中瀬戸印花文皿である。高台は梯形に削り出している。底部内面に十六弁の菊花文を押印している。色調は灰褐色を呈し、内外面に灰色に発色する釉を施している。

以上、本遺跡は古代・中世・近世の複合遺跡であり、特に近世の遺物が顕著である。なお、遺跡は現在水田として利用されている。なお、付近の米道古墳では墳丘の一部が残存しているが、遺物は全く表面採集できなかった。

(榎木 和代)

(6) その他の採集遺物 (図版4の55~95)

55は金剛新地区で採集したとされる縄文時代分銅型打製石斧である。重量261.8gを量る。

56は珠洲焼壺の胴部破片である。内面に丸い当て具による押圧痕を残し、外面に叩き目を施す。

57は中世の土師器皿である。色調は橙褐色を呈する。胎土は緻密である。

58は越中瀬戸碗。底部に右回転削り調整を施し、高台は削り出している。

59は第6のハ地区で採集した越中瀬戸の灰釉皿の破片である。断面三角形の高台を有し、底部内面に十六弁の菊花文を押印する。色調は赤褐色を呈し、口縁部内外面に灰釉を施す。

60は越中瀬戸皿の底部破片である。内外面に墨書が観察されるが、判読は不可能である。底部には糸切り痕が残る。色調は淡褐色を呈する。胎土は砂粒を少量含む。内外面に撫で調整が施される。

61は越中瀬戸皿の底部破片である。底径は5.0cmを測る。内面と外面の一部に茶褐色の発色をする鉄釉を施す。外面底部に糸切り痕が残る。胎土は、砂粒を微量含み、焼成は堅緻である。

62も越中瀬戸碗である。高台は削り出しており、復元高台径は6cmである。内面に黒色に発

色する鉄軸を施しているが、一部は茶褐色に発色している。外面は、回転範囲調整を施し、茶褐色を呈する。

63は越中瀬戸窯道具である。底部外面に撫で調整、底部内面に回転範囲調整を施す。淡黄褐色を呈する。

64は越中瀬戸碗の底部破片である。底径は4.4cmを測る。外面に茶褐色に発色する鉄軸を施す。底部に回転範囲調整を施す。内面は淡灰褐色を呈する。

65は第7の二地区で採集した越中瀬戸蠟台の破片である。底部に輪廻回転糸切り痕を残す。また深さ8.0mmほどの小穴を開けている。内面と外面脚部上半以上には黒色に発色する鉄軸を施す。色調は茶褐色を呈し、胎土に砂粒を少量含む。

66は第9のイ地区で採集した越中瀬戸すり鉢の胴部破片である。内面には8本のおろし目を有し、内外面に暗黒褐色の釉を施す。

67は寛永通宝である。

68は開元通宝である。

69は越中瀬戸壺の口縁部である。復元口径は約9cmを測る。内外面に濃茶褐色に発色する鉄軸を施す。

70は越中瀬戸骨壺の底部破片である。底部に糸切り痕を残す。色調は灰褐色を呈する。胎土は砂粒を多く含み、焼成は堅緻である。

71は第7の二地区で採集した越中瀬戸すり鉢の底部破片である。底部に輪廻回転糸切り痕を残す。外面は輪廻回転撫で調整を施す。内面には密におろし目を残す。内外面ともに褐色に発色する鉄軸を施す。色調は淡黄褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。

72は第9区で採集した土錘である。

73~95は第3地区で採集した土錘及び陶錘である。

73は完形の土錘で、長さ3.7cm、孔径1.2cm、最大外径3.6cmを測り、重さは38.8gである。

74は体部側面を一部欠くが、ほぼ完形に近く、長さ4.5cm、孔径1.9cm、外径5.1cmを測り、重さは90.2gである。

75は体部側面を半分程度欠くが、長さ4.5cm、孔径約2.1cm、外径5.1cmを測る。重さは66.2gである。

76は全体の3分の2程度を欠失するが、長さ4.9cm、孔径1.9cm、復元外径5.5cmを測る。重さは70.0gである。内外面に茶褐色に発色する鉄軸がかかる。

77は土錘である。長さは4.5cm、孔径1.8cm、径4.9cmを測り、橙褐色を呈する。重さは109.0gであり、焼成は良好である。

78は土錘である。長さは4.3cm、孔径2.0cm、径4.8cmを測り橙褐色を呈する。重さは80.6gであり、一部を欠損する。

79は土錘である。長さは4.7cm、孔径1.8cm、径3.9cmを測り、灰褐色を呈する。重さは30.9

g であり、一部を欠損する。

80は土錘である。長さは4.8cm, 孔径2.3cm, 径4.6cmを測り、明橙褐色を呈する。重さは100.7gである。

81は暗茶褐色を呈する。約2分の1が残存する。長さ5.1cm, 復元径5.2cm, 孔径2.0cmを測り、重さは62.2gである。外面全体に指圧痕が残る。

82は灰褐色を呈する。約4分の3が残存する。長さ4.6cm, 復元径5.6cm, 孔径2.1cmを測り、重さは98.6gである。表面は磨滅している。

83は茶褐色を呈する。約3分の1が残存する。長さ6.1cm, 復元径5.0cm, 孔径2.2cmを測り、重さは95.0gである。外面に指頭圧痕が残る。

84は灰褐色を呈する。約2分の1が残存する。長さ4.5cm, 外径4.9cm, 孔径1.8cmを測り、重さは79.8gである。

85は灰褐色を呈する。完形品である。長さ4.9cm, 外径5.5cm, 孔径2.1cmを測り、重さは112.6gである。

86は茶褐色を呈する。完形品である。長さ4.8cm, 外径5.4cm, 孔径2.1cmを測り、重さは128.8gである。

87は土錘である。長さ約4.0cm, 孔径約1.3cm, 外径約3.1cmを測り、重さは34.6gである。色調は淡褐色を呈し、外面の一部を欠損する。

88は土錘である。長さ約4.3cm, 孔径約2.0cm, 外径約4.7cmを測り、重さは79.2gである。色調は灰褐色から橙褐色を呈し、外面の一部を欠損する。

89は土錘である。長さ約4.5cm, 孔径約2.1cm, 外径約4.6cmを測り、重さは95.8gである。外面に指圧痕が認められ、一部を欠損する。

90は陶錘である。長さ5.0cm, 最大径5.3cm, 重量130.6gを測る。全体に釉が施されているが、表面の釉は剥げ落ちている。色調は淡黄褐色を呈する。

91は陶錘である。長さ6.2cm, 最大径4.6cm, 重量112.6gを測る。色調は全体に釉がかかり、茶褐色を呈する。表面には顕著に指圧痕が残っている。

92は完形の越中瀬戸管状陶錘である。孔径は1.3cm, 最大径は上端にあり2.4cmを測る。重さは17.8gである。内外面ともに茶色に発色する鉄釉を施す。また4箇所に熔着痕を残す。

93は体部側面を一部欠くがほぼ完形に近い物である。孔径は1.9cm, 最大径は体部中程にあり4.3cmを測る。重さは117.4gである。外面には指圧痕を残す。内外面ともに褐色に発色する鉄釉を施す。色調は淡褐色を呈し、胎土に砂粒を少量含む。

94は下半を一部欠失するがほぼ完形に近いものである。孔径2.1cm, 最大径は体部中程にあり5.1cmを測る。重さは89.2gである。外面に指圧痕を残す。内外面ともに褐色に発色する鉄釉を施す。色調は暗褐色を呈し、胎土に親指大程の小石を1個含む。

95は体部側面を一部欠くがほぼ完形に近いものである。孔径は1.9cm、最大径は体部中程にあり5.5cmを測る。重さは120.8gである。内外面ともに褐色に発色する鉄軸を施す。色調は茶色を呈し、胎土に砂粒を少量含む。

(榎木 和代、葛山 拓也、高橋 浩二、谷杉 延子、向山 静子、野村 祐一)

2 遺物の散布状態（第3～5図）

1990年度の調査によって、V地区から544破片、口縁部4.8個体分の資料を採集した。これらは縄文時代から近世にいたるものであり、従来的にしか判明していなかった河岸段丘下面の利用状況を知るための貴重な資料になるものである。

なお本年度調査地区は、大きくみれば河岸段丘下面の氾濫原に相当するが、南半は複合扇状地である（第2図）。標高は、河岸段丘下面が58m～138mを測り80mの比高差を有し、複合扇状地部分は138m～160mを測り22mの比高差を有する。

（1）縄文時代の散布状態（第3図）

縄文時代の遺物は、土器257片・0.33個体分、石器5点、黒曜石チップ1点である。小破片が多く、器種を同定できるものはほとんどない。時期は、後期を中心とした一部晩期におよび、42小地区中20地区で採集した。特に、4のイロ地区は、金剛新造跡に相当しており、土器223片・石器5点の集中がみられる。また、8のハニ・9のハ地区も、米道遺跡に相当しており、それぞれ土器8片、6片の分布がみられる。

散布状態は、河岸段丘下面の柄津川両岸に散在的に分布しており、標高の高低による分布の差は認めにくい。

（2）弥生・古墳時代遺物の散布状態（第4図）

弥生・古墳時代の遺物は、1989年度同様皆無であった。1987・1988年度扇状地端部の調査では、縄文・古代・中世を上回る量の資料を採集できたことと対照的である。

（3）古代遺物の散布状態（第4図）

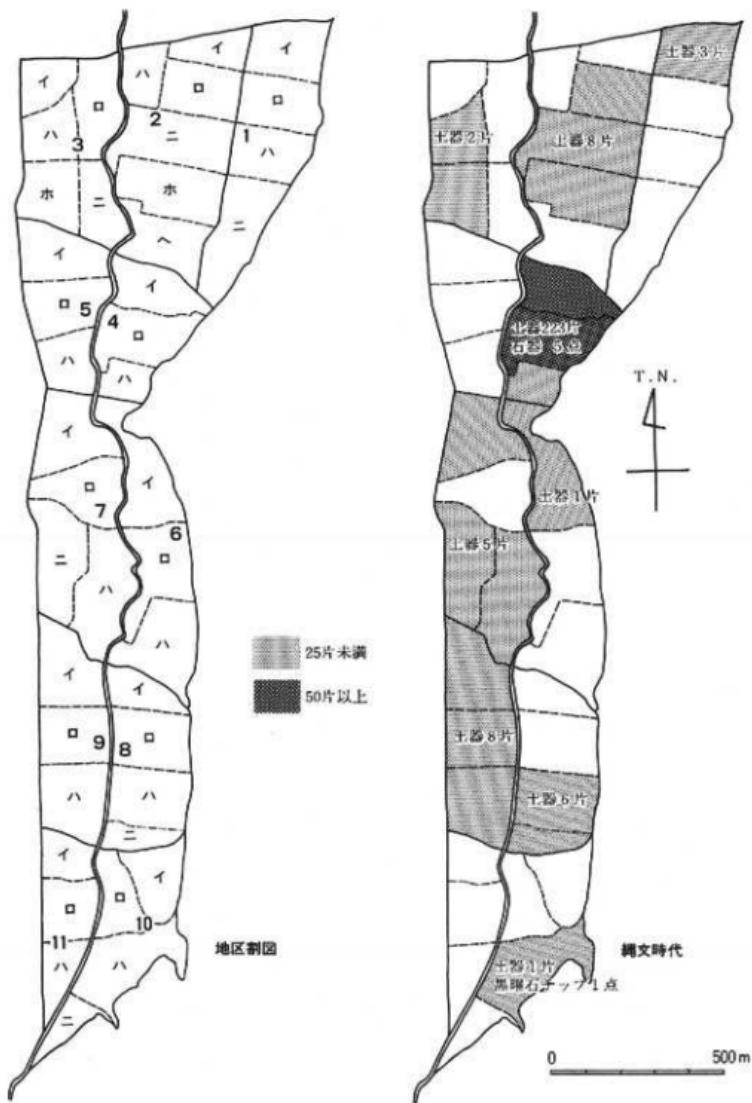
古代の遺物7片・0.2個体分を5小地区で採集した。須恵器は杯類6片・0.1個体分、土師器は長甌1片からなる。7世紀の遺物は確認できず、すべて8世紀初め以降のものである。特に、10のロハニ地区は、米道遺跡に相当しており、須恵器4片の集中がみられる。

散布状態は、河岸段丘面と柄津川に挟まれた場所に散在的に分布する。この事実は、河岸段丘上に存在する該期の遺跡との関連が想定される。

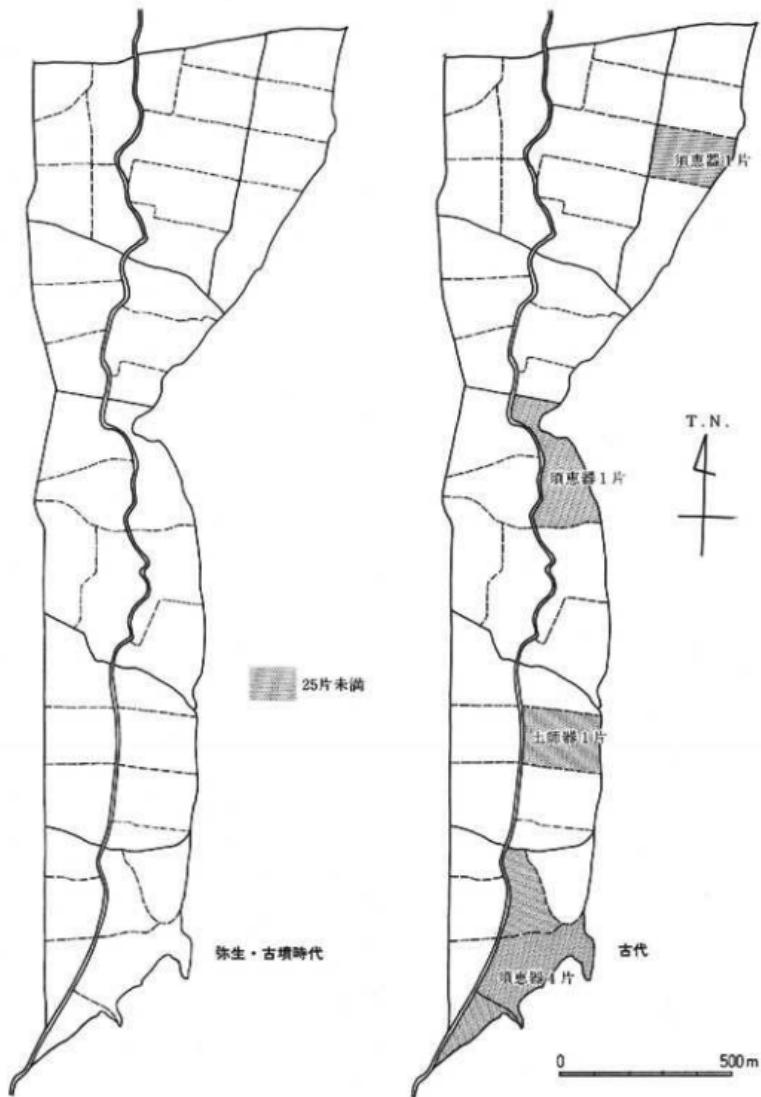
（4）中世遺物の散布状態（第5図）

中世の遺物は、11片・*個体分（存在するが比率としてあらわれないもの）を9小地区から採集した。土師器皿が8片・*個体分、珠洲壺3片・*個体分である。12世紀から15世紀の資料が主であり、16世紀のものは確認できない。なお、八尾窯産の製品は皆無である。

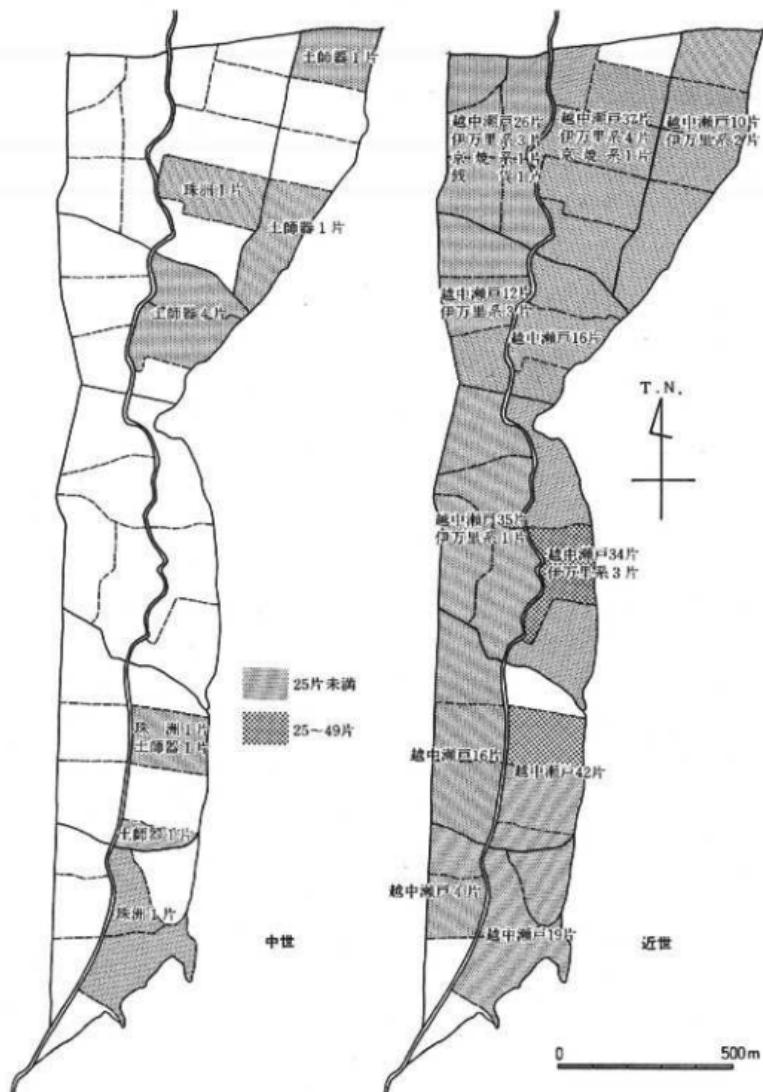
散布状態は、古代同様河岸段丘面と柄津川に挟まれた場所に散在的に分布するが、面的およ



第3図 VI地区地区割図および縄文時代遺物散布図



第4図 VI地区弥生・古墳時代および古代遺物散布図



第5図 VI地区中世および近世遺物散布図

び量的に若干増加している。

(5) 近世遺物の散布状態（第5図）

近世の遺物は、269片・4.1個体分を全調査小地区42地区中38地区から採集した。採集量も急増している。その構成は、越中瀬戸が251片・4.0個体分、伊万里系が16片・0.1個体分、京焼系が2片・*個体分、寛永通宝1点である。

散布状態は、中世までとは異なり、扇状地と氾濫原を通じて調査地区に散布している。特に、橋津川左岸は、古代・中世とともに遺物が分布しないが、該期になるとほぼ全面に分布するようになる。詳細に見ると、自然堤防上の現在の各集落の位置付近には必ず散布しており、現集落が該期に成立した可能性が想定される。

(6) 遺物の散布についての小結

以上のように、本年度調査地区においても、時期によって散布状態がかなり異なることが判明した。またその様相は、他の地区と共通するところと相違するところがある。標高50m以上の高位の扇状地における散布状態には、以下の特徴があると考えた。

縄文時代においては、後期・晩期の資料が分散的に散布する。時期的には河岸段丘上の遺跡と共通するが、河岸段丘上において集中的に散布するのに比して、かなり分散的である。この在り方は扇状地端部と同様であり、河岸段丘上に拠点的な集落が存在し、扇状地において広範な採集活動がおこなわれたことを示唆している。

弥生・古墳時代の遺物は、一点も採集できず、中・高位の河岸段丘と同様である。この時期に、扇状地端部では遺物の散布が激増し、低位の河岸段丘にも一定量の遺物が散布することと対照的である。

古代から中世にかけて、少量ではあるが再び遺物が散布するようになり、漸増していく。高位扇状地の再開発は、当地では8世紀初め頃以後に進行したと考えてよい。その時期と、集村的な在り方からみて、これは国家的な事業の一環としてなされた結果である可能性が高いと考える。この在り方は扇端部低位部や低位の小規模河川氾濫原の微高地と同様であるが、中・高位河岸段丘の再開発は10世紀以後とやや遅れる。

これに対して、中世の遺物はより分散的に散布している。また、古代の遺物を採集できる地区と、中世の遺物を採集できる地区とはあまり一致しないことが多く、時代の差が集落立地に表れている可能性が高い。

近世の遺物が激増することは、すべての地区で共通する現象であるが、扇状地高位部分においては特に顕著である。この地区は、洪水に対して安全であり、水はけも良く、居住地に適した条件を備えている。さらに、今回新たに発見された谷口遺跡にみられるように、橋津川自然堤防および氾濫原の微高地に現在の集落が存在し、その周辺から必ず該期の遺物が採集できることは、現在の集落の景観が近世まで遡ることを示している。

（前川 要）

第3章 おわりに

1990年度に分布調査によって、新たに544破片・口縁部4.8個体分の遺物を採集し、6箇年の採集遺物は総計12,483片・218.7個体分となった。また遺跡数は5遺跡を加え118遺跡となった。Ⅳ地区は従来、縄文時代・古代遺跡各1箇所と越中瀬戸窯址1箇所が知られていただけの地区であり、分布調査は遺跡の全体像を考える上で大きな成果をあげたと言える。

本年度の調査地区は、標高約50m～170mを測る扇状地の高位部分と、小規模河川である柄津川の氾濫原である。この地区には現在は小規模な集落が点在し、残りの地区にもくまなく耕地が広がっている。これらの場所は、氾濫原は水の便がよいが河川の影響を受けやすいこと、扇状地高位部分は安定しているが水利が悪いことから、どのような開発がなされて現代の景観に至ったか興味がもたれる所である。

当地区では旧石器時代の遺物は採集できなかったが、縄文時代後・晩期を中心とする資料が調査地区に散布する。その様相は、柄津川右岸標高約80mの金剛新遺跡に集中して散布し、その他の場所では標高の高低にかかわらずほぼ一様に分散的に散布するというものである。

のことから当地区は、河岸段丘とならんで縄文人の生活の重要な舞台となったことが判る。ただし標高のより高い河岸段丘上（上段段丘）では中期のものが目立つに対して、本調査地区では後期が主体をなして、全国的な縄文遺跡の立地の変化に対応している可能性がある。また遺跡以外の場所でも広く分散的に資料が散布する様相は、V地区の扇状地と同様であり、縄文人の狩猟・採集活動の結果と推察しておきたい。しかし遺跡として設定することは出来ないが、その中に小規模な集落が存在したことには注意が必要である。

弥生・古墳時代の遺物は、1点も採集できなかった。ただし当地区には古墳が存在したとする記録があり今後、該期の遺跡にも気をつけたい。しかし当地区の氾濫原と同様の地形である白岩河沿いのⅡ地区でも、一連の扇状地であるV地区でも同様の結果を得たことから、当期の遺跡は存在してもそれほど大きな規模のものではないと推察する。

古代以後になると、わずかではあるが再び遺物が散布するようになる。その再開発の、開始時期は、ほぼ7世紀末・8世紀初め頃と推定できる。そしてその資料は柄津川右岸すなわち大規模河川である常願寺川の氾濫からより安全で、上段段丘に接した地区に集中して存在する。標高の違いはあまり関係しないようである。そして7世紀の資料が不明で8世紀にこれが増加する在り方は、分布調査を実施したすべての地区で認めることが出来た現象である。そして採集遺物の年代から、その新出の集落が中世集落に連なることはほとんどなく、多くの場合は10・11世紀に衰退したと推定することが出来た。このことは当期の開発が、律令国家の公的な政策あるいはIV地区で考察を加えた東大寺を軸とする初期莊園の活動と密接な関係をもっていたこ

とを推測させる。

中世の資料も古代と同様に、柄津川右岸に少量が分散的に散布する。そして從来から指摘するように、遺物の採集量は古代とそれほど違わないが、漆器と鉄製煮炊具の普及を考えるならば漸増している可能性が高い。そして從来の各調査地区と同様に、16世紀の資料は採集できなかった。

近世には一転して、調査地区的扇状地と氾濫原を通じて、広く遺物が散布するようになる。柄津川左岸でも少なからぬ資料が散布し、現代の立川町の中心的な市街地である五百石がこの柄津川左岸調査地区的西北に隣接するのである。また氾濫原微高地にも例外なくかなりの資料が散布し、現代の集落と重なっている。このように近代の当地区にみる景観の基本はこの時期に形成されたと考えうる。

以上のように本年度も精密な分布調査を実施することによって、遺跡の範囲を確認するだけではなく、発掘調査でもなかなか知りにくい地域の歴史を考える資料を得ることが出来た。

來年度以後、扇状地の最奥部あるいは立山信仰関係遺跡についても、出来る限りの追加調査をおこなって後に、最終的な遺跡地図と遺跡台帳とを刊行することを予定している。

(宇野 隆夫、前川 要、森 秀典)

参考文献

- 1 富山県『富山県史』考古編, 1972年。
- 2 立山町教育委員会『立山町史』上巻, 1977年。
- 3 立山町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室『立山町埋蔵文化財分布調査報告』I, 立山町文化財調査報告書第1冊, 1986年。
- 4 立山町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室『立山町埋蔵文化財分布調査報告』II, 立山町文化財調査報告書第2冊, 1987年。
- 5 立山町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室『立山町埋蔵文化財分布調査報告』III, 立山町文化財調査報告書第5冊, 1988年。
- 6 立山町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室『立山町埋蔵文化財分布調査報告』IV, 立山町文化財調査報告書第8冊, 1989年。
- 7 立山町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室『立山町埋蔵文化財分布調査報告』V, 立山町文化財調査報告書第10冊, 1990年。
- 8 小島俊彰「北陸の縄文時代中期の編年」『大境』第5号, 1974年。
- 9 南久和「北陸の縄文時代中期の編年他9編」1985年。
- 10 能都町教育委員会『真脇遺跡』1986年。
- 11 吉岡康暢「奈良・平安時代の土器編年」『東大寺領横江庄遺跡』1983年。
- 12 石川考古学研究会『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』資料編・報告編, 1988年。
- 13 吉岡康暢「加賀・珠洲」『世界陶磁全集』3日本中世, 1977年。
- 14 吉岡康暢「日本海域の土器・陶磁」中世編, 人類史叢書10, 1989年。
- 15 宮田進一「越中瀬戸の窯資料(1)」『大境』第12号, 1988年。

図 版



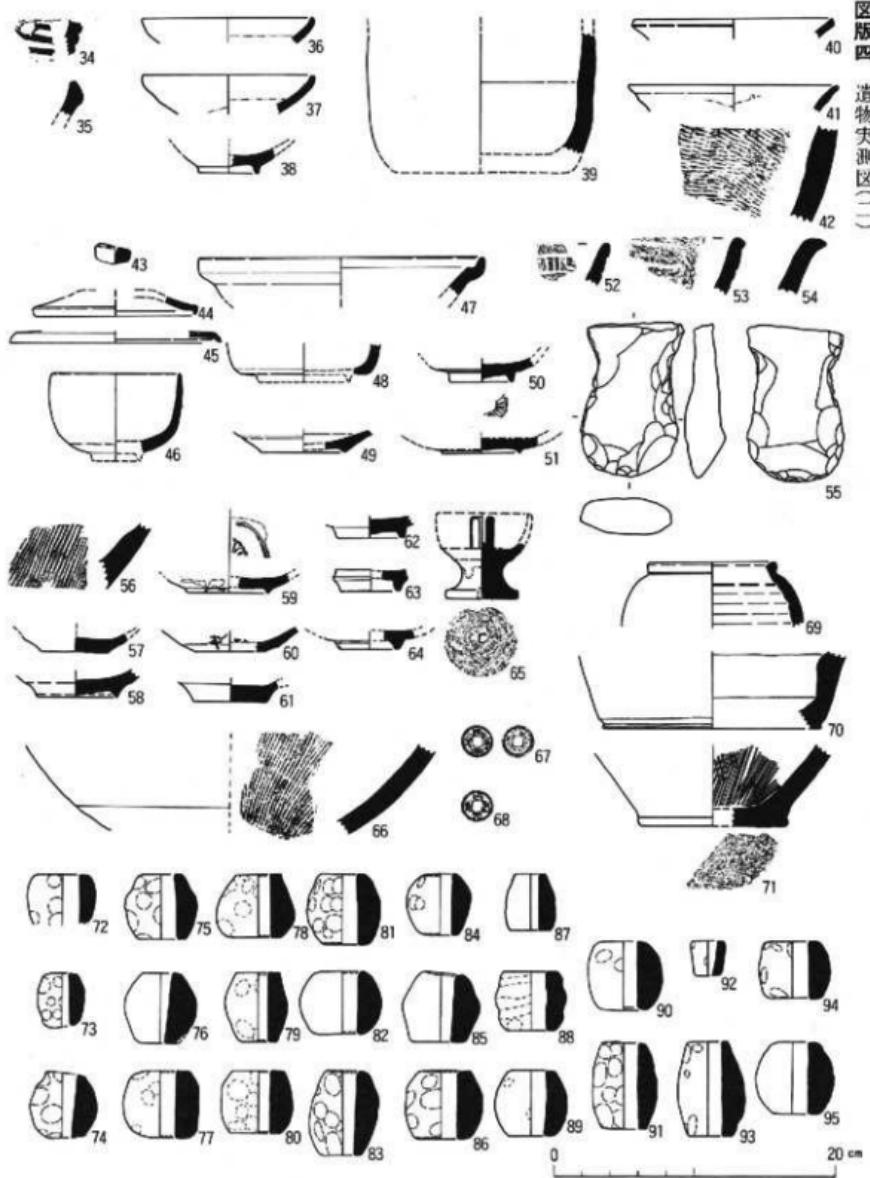
1951年撮影



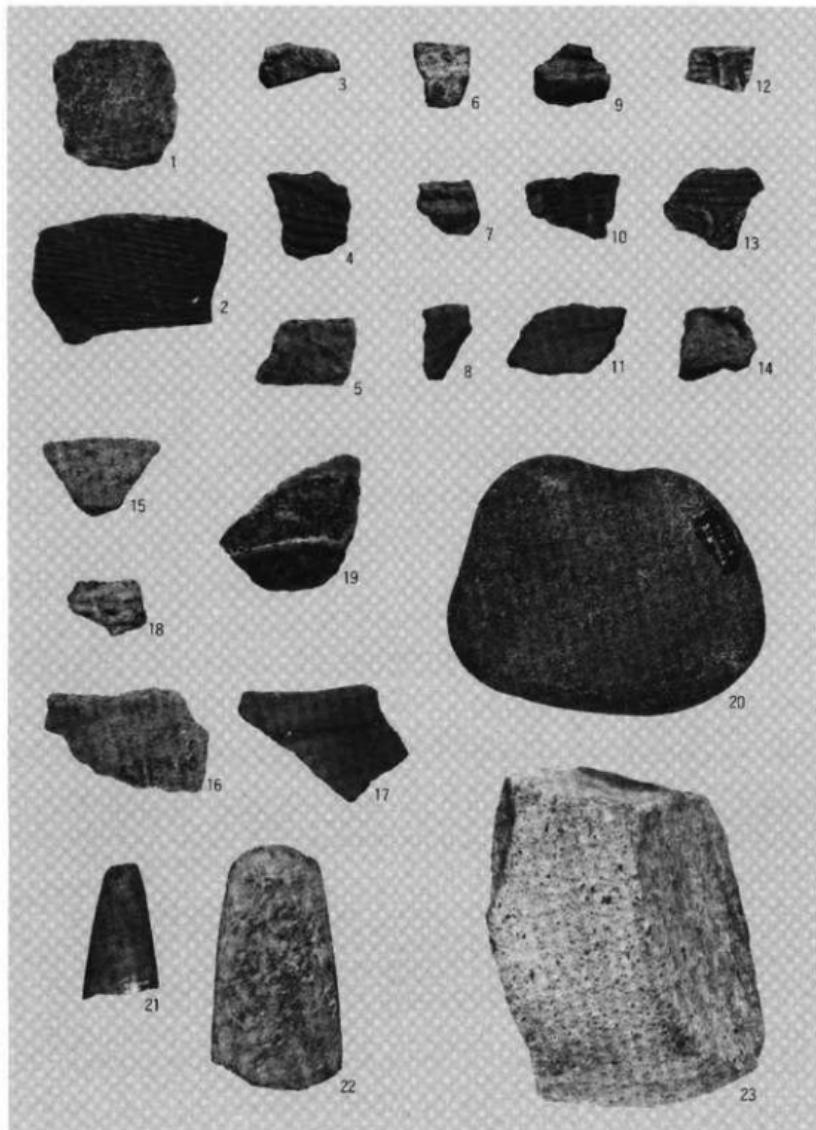
1988年撮影



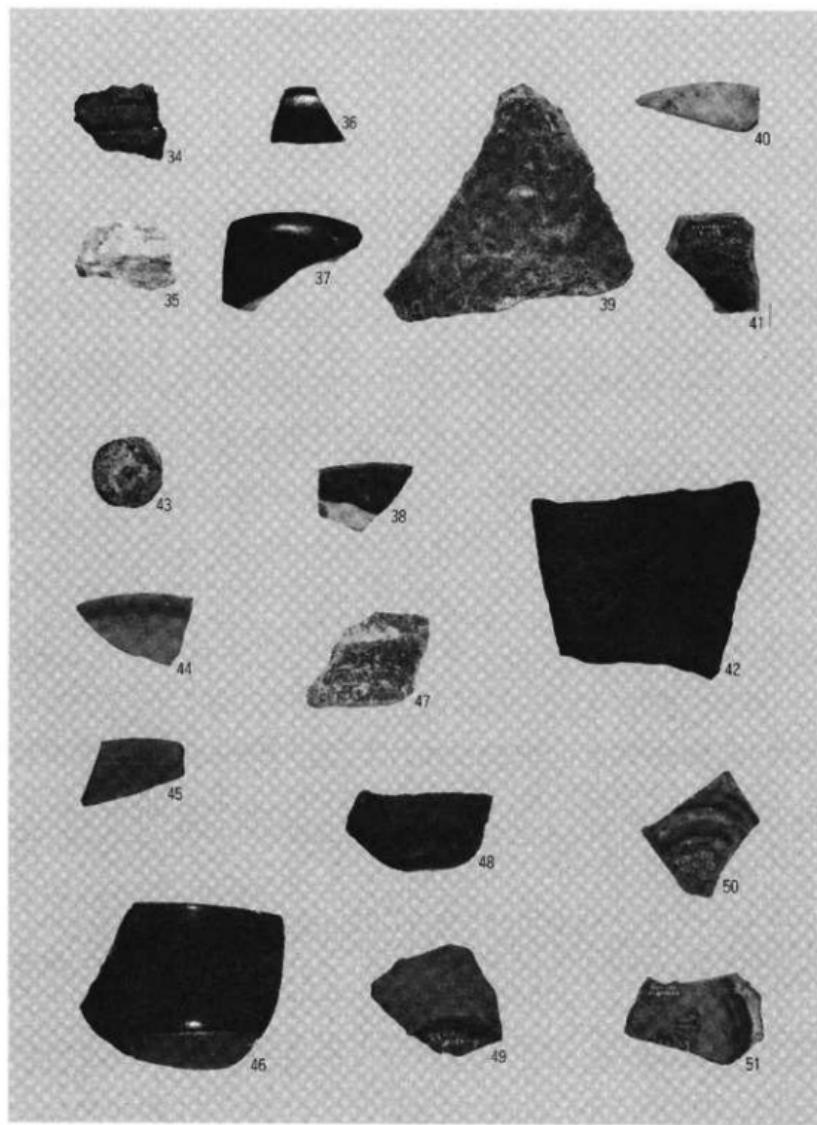
1・2野沢遺跡、3~23金剛新道路、24~33新瀬戸古窯(図版5~8参照)



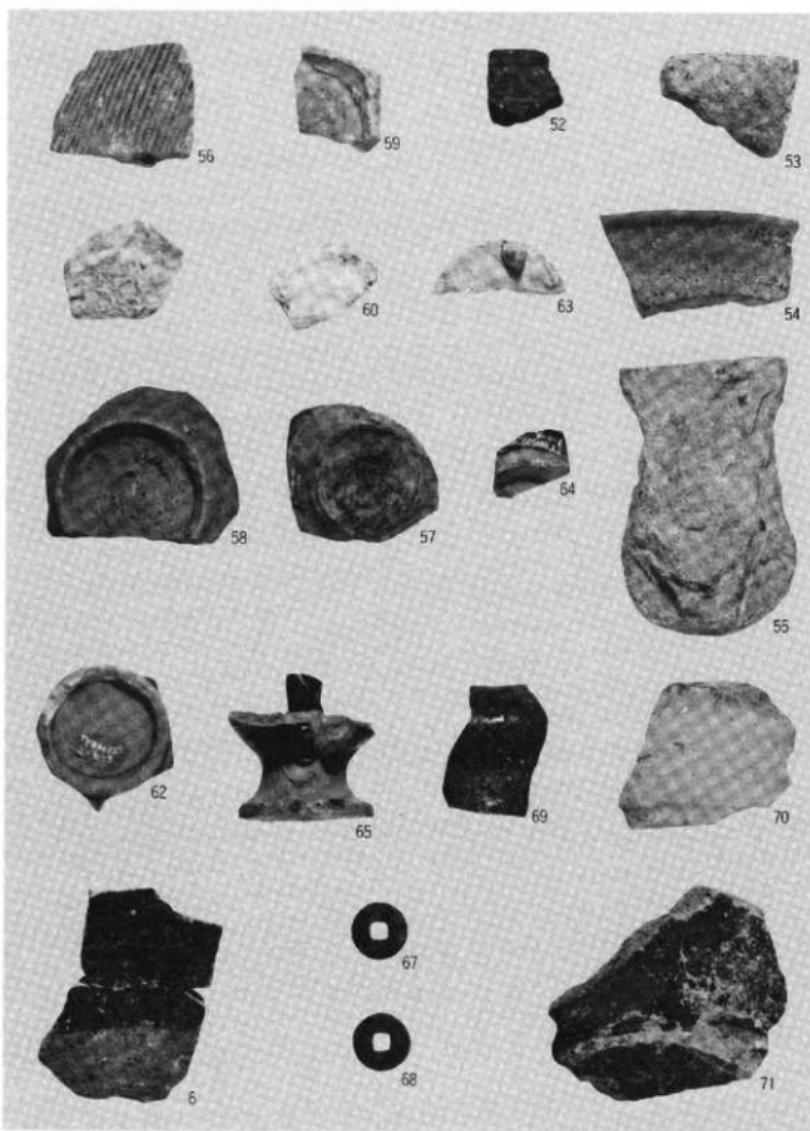
34~39 米道遺跡、40~51 谷口遺跡、52~95 設定遺跡外採集品 (図版 5~8 参照)

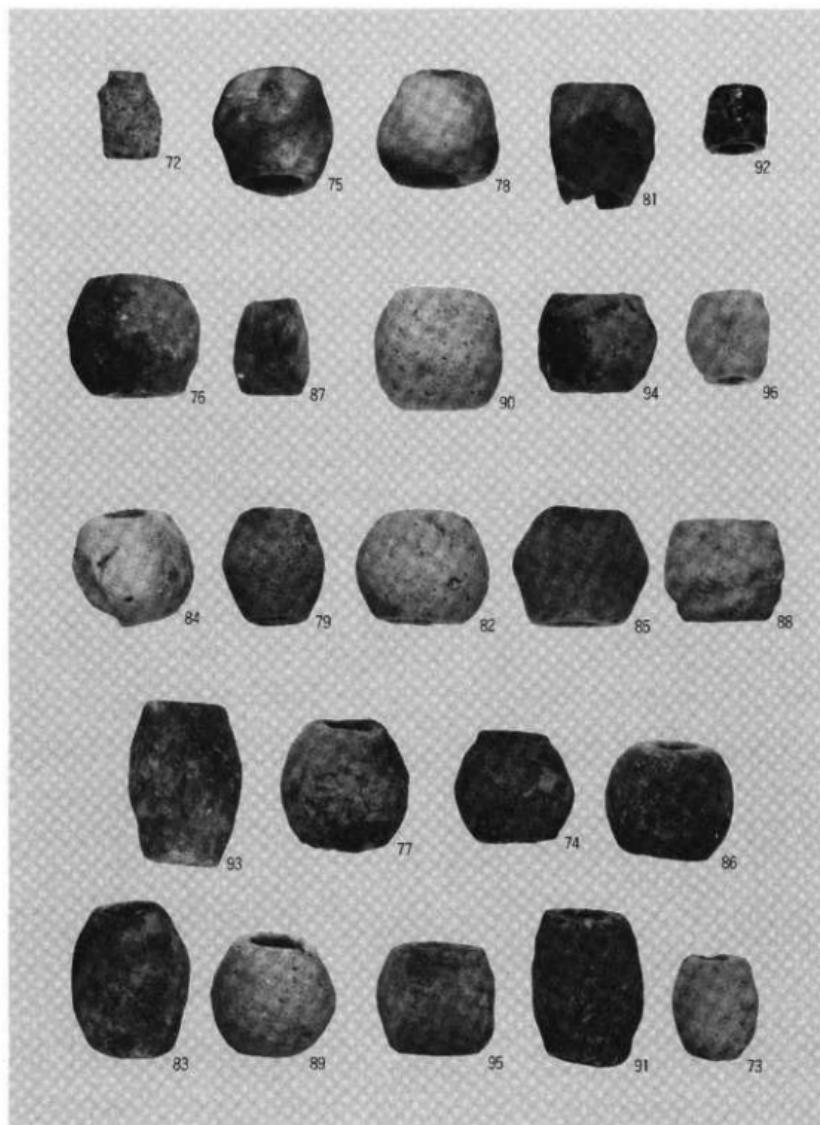






圖版八 遺物寫真(四)





- 114 野沢遺跡
(縄文時代、
中・近世)
- 115 金剛新遺跡
(縄文時代、
近世)
- 116 新瀬戸古窯
(近世)
- 117 米道遺跡
(縄文時代、
近世)
- 118 米道古墳
(古墳時代)
- 119 谷口遺跡
(古墳時代～
近世)
- ：縄文時代遺物採
集地点
- △：弥生・古墳時代
遺物採集地点
- ：古代遺物採集地
点
- ◇：中世遺物採集地
点
- ：近世遺物採集地
点



1991年3月25日 印刷

1991年3月30日 発行

立山町埋蔵文化財分布調査報告VI

立山町文化財調査報告書第12冊

編集・発行 立山町教育委員会
富山大学人文学部考古学研究室

印刷 ヨシダ印刷株式会社

